

京都キリスト召団 ペンテコステ集会

助け主、真理の御霊なる聖霊

2019年6月9日
奥田 昌道

十字架なくして聖霊は来ない 年寄りも夢を見る ヨエルの預言 小冊子『聖霊・助け主・真理の御霊』の「あとがき」 使徒行伝1章、2章 イザヤ書64章 ヨハネ伝14章 ヨハネ伝15章 使徒行伝20章

●十字架なくして聖霊は来ない

「この火既に燃えたらんには我何をか要せん」

と。前日も、このところ二、三回ルカ伝を読んでいて、聖霊に関することがいろいろ出てきます。

「私のことをボロクソに言ってもいいが、聖霊を^{けが}瀆す者は永遠に赦されない」

とか。そうやって、聖霊という方をイエスという方はどんなに大事にしておられたか。地上におられるときは、やはりイエスという一人の人間です。生身^{なまみ}の人間です。だから、聖霊という別の人格——「霊格」と言うかな——その方を非常に尊んでいらつしやる。その聖霊なるお方とイエスが今度はどう合体してしまつて、我々の中に宿つてくださることだと思ふ。イエスというお方の中には、マリヤさんという人の部分と、聖霊によつて身ごもつたということで聖霊がじかに働いておられる。

やっぱりその部分があるから、我々普通の人間とはちがつて、悔い改めのバプテスマを人々が受けている時、「自分も特別ではないよ」と言つてお受けになった。しかし、水から上がつて祈つておられる時に天が開けて、聖霊が鳩のごとく降つてきた。それからイエスの伝道が始まる。いや、伝道が始まる前に荒野の試みがあります。聖霊が来たからもう大丈夫ではない。聖霊が来てからサタンとの戦いがあります。四十日四十夜断食された。サタンがやつて来て、

「お前は神の子だろ。そこにいるがっている石ころをパンに変えてごらん」と。それから、

「高い所から飛び降りてごらん。『天使が支える』とちゃんと詩篇に約束されているから」

と。サタンは賢い。全部、御言をもつて挑戦してきている。キリストも御言でそれに対してお答えになっている。「高い所から飛び下りても、天使たちがさつと支える」と、ちゃんと詩篇に出てきてます。



〔註：「9あなたは主を避け所とし、いと高き者をすまいとしたので、10災はあなたに臨まず、悩みはあなたの天幕に近づくことはない。11これは主があなたのために天使たちに命じて、あなたの歩むすべての道であなたを守らせられるからである。12彼らはその手で、あなたをささえ、石に足を打ちつけることのないようにする。」（詩篇91・9〜12）〕

それに対して、

「神を試みるべからず」

と。足を滑らせた時には守ってください。でも、だからといって、「自分で飛び下りてみる」という、そんなことは絶対にしてはならない。これは神を試みることになりますから。そのところを、クリスチャンは間違えないようにしていただきたい。やはりクリスチャン自身は、自分は注意深く生活する。でも、足を滑らすことがある。その時にはさつと護りの手が差し伸べられる。けれども、それだからといって、でたらめな事をやっていて、「その時は助けてくれるさ」なんて、そんな我が儘は許されません。そういうことだと私は思う。それから、三つ目の挑戦は、

「私と手を結んだら、この全世界をあなたに上げるよ」

「いや、神のみに仕えたてまつるべし」

と。それも挑戦を退けられた。そういうふうには、三つの試みにそれぞれ深い意味があるわけです。それを全部、御言によって拒絶された。そういうことがイエスの伝道の始めにあります。それから伝道が始まっていくということでしょう。

クリスチャンというのは決して、この地上にいるかぎり、絶対に安全なんてありえない。絶えずサタンという神さまに逆らう霊が、我々を神・キリストさまから引き離そうとする。しかも、「私はサタンではございません」なんて絶対に言ってこないですよ。羊の衣を着た狼、これがサタンの姿です。だから、

「蛇のごとく聴く、鳩のごとく素直なれ」

と。「蛇のように聴く」ということが先に出てきます。これは私に対しての言葉みたいで、よく私は騙されやすいんです。先日、大変騙されたことがありました。だから、「蛇のごとく聴く、鳩のごとく素直なれ」という。元最高裁判事、法律家として騙されたのなら、これは大変なことですけども、クリスチャンとして騙された。クリスチャンは信ずるほうが先になりますから、それで騙された。そういうことです。だから、

たくさん兄弟姉妹、それが御霊によって一つになれば、その集会は強い。集会をつぶすのは分裂なんです。だいたい見ていたらわかる。分裂によってその集会はつぶれていく。福音書の中でも、

「サタンのベルゼブルによってサタンを追い出している」

と言って、パリサイ人がキリストを非難した時に、

「分裂したらつぶれてしまうんだ」



とお答えになっています。キリストも弟子たちに対して本当に、

「一つになれ。一つであるように」

ということを物凄く願っておられる。ヨハネ伝の17章の祈りのところでも、

「彼等が一つとならんためなり。今までは私が彼等を守ってきました。けれども、私は御許に参ります。どうぞ、あなたの御名によって彼等を守ってやってください。そしてまた、彼等によって新しくキリストを受け入れる者たちをも守ってください。みな一つとならんためであります」

ということを、ヨハネ伝17章の「大祭司の祈り」と言われている所で願ってくださいている。しかも、17章のいちばん始めのところに、

「³永遠の生命は、唯一の真の神にいます汝と、なんじの遣し給いしイエス・

キリストとを知るにあり。」(ヨハネ17・3)

とあります。「知る」というのは「合体する」ということ。聖書で「知る」というのは、ちょうど男女の関係で一つになるように、それを「知る」という。

「知った。そして子どもが生まれた」

とよく出てきます。そういうふう「知る」というのは「一つになる」ということです。

「永遠の生命とは、唯一の真^{まこと}でいます神と、そしてあなたがお遣しになった

イエス・キリストと一つになること、これが永遠の生命です」

ということを自ら祈っておられる。「彼等が一つとなりますように」ということをまた祈ってくださいている。まことに聖書の言葉は、

「わが語りし言^{ことば}は霊^{いのち}なり生命なり。肉は役立たない。活かすものは霊であって、

肉は役立たない」

という。そこである「霊」というのは「天の次元のもの」です。「肉」というのは「地上的なもの」です。我々の肉の命は必ず終わります。けれども、肉の命をいただいているあいだに、本当に御霊という新しい生命が宿るなら、それは永遠です。滅びない。永遠に滅びないもの。キリストはそれを与えようとして来てくださった。

「この火既に燃えたらんには何をか望まん」

と、ルカ伝12章49節にあります。これは聖霊の火です。弟子たちの中にこの聖霊の火が燃えてほしい。それには十字架という血のバプテスマを通らなければならない。しかし、それが成就するまで、

「私は思い迫ること如何ばかりか。聖霊をやりたい。けれども、今はだめだ」

と。それが本当に成就して、聖霊の火が燃えあがる。それをキリストは望んでおられた。だから、十字架なくして聖霊は来ないんです。

旧約聖書の中で「神の霊」が預言者たちに降っています。あの旧約聖書における「神の霊」と、十字架を通つてのちにきた「聖霊」とは違う。それは小池先生がはっきり言っておられます。



十字架を通ってきているのは「贖いの霊」ですから、我々はそこでもうゼロ、旧い私達はぶつ飛ばされている、片付けられている。そこへ聖き神の霊が降ってくる。

でも、旧約聖書のときには、贖いなしに直接来てますから、絶えずそれは緊張関係がある。でも、新約聖書での聖霊は、助け主、慰め主、困っている時に「大丈夫だよ」と励ましてくださる霊なんです。旧約の聖霊をいただいている預言者たちは、絶えず緊張関係の中で生きていたように思います。しかも、聖霊を受ける時にすごい現象が起こっている。例えばイザヤだったら、火箸で唇が潔められたとか、そういうことが出てきたり、いろいろあります。

そういった潔き所にしか神の霊は臨みませんが、その潔さというのは、

「十字架であなた方は潔い」

と。それでなかったら、キリストの十字架はむだでしょ。人間が自分で潔めることができるのだったら、キリストは要らないわけでしょ。

●年寄りも夢を見る

先ほどの讃美歌499番で3節をカットしました。なぜカットしたか、お気づきでしょうか。

1. 御霊より降りて みたまくだ むかしの如く、

くすしき御業を みわざ 現わしたまえ。

(おりかえし)

代々にいます みたまの神よ、

今しもこの身に みちさせ給え。

2. 御霊よ降りて めぐみの雨に

かわける心を 潤したまえ。

3. 御霊よ、降りて けがれを潔め

とうとき救いに いらしめ給え。

この3節は怪しからんですよ。もう十字架で潔めているではないか。十字架で潔まっているから、聖霊という聖なる霊が来てくださるのに、これから「けがれを潔め」というのは旧約の世界ですよ。そういうことが意識なく入っているというのは、やはり讃美歌の作者が本当に聖霊の世界を知らないからではないか、という疑いさえ私はもちたくなります。気づかれませんでしたか、そういうことを。

「御霊よ、降りて けがれを潔め」という。旧約のイザヤ書には、イザヤが神に召される時に「火がくだってきて唇を潔める」という。でも、我々においては十字架が潔めてくださる。いや、もう十字架以前にキリストは弟子たちに、

「汝らは潔し、わが語りたる言によりてなり」
ことば

と、そこまで言っておられる。私達においてはもう十字架が完全に私達をあらゆる穢れか



ら潔めてくださっているんです。

「汝らは潔し、わが十字架によりてなり」

と。ところが、この「御霊よ、降りて けがれを潔め」というのは「まだけがれています」と告白しているんですよ。ですから、そういうところが、私はいかななものかと思う。誰も讃美歌委員会にこんなことを言っていないんじゃないでしょうか(笑)。まあそのあたりが、一般の教会でも、本当に聖霊の火ということをごだけ真剣に、現代的なものとして、今の時代として受け入れているかという、その一つの試金石だと思います。

聖霊を強調しますと、「聖霊派」なんていう名前を付けられる。では、

「聖霊派とは何ですか。あなた方は何ですか。非聖霊ですか？」

と言いたくなる。たとえば悪いけれども、気の抜けたビールですわ。全然おいしくないですね、生ぬるくて、気がぬけていて。

それからさつき、聖歌の573番「みたまはあめより」を歌いました。これは先取りして歌った。いや本当はもうこれでいてほしい。常にこれでいてほしいんです。

1. 御霊はあめより われにくだりて

よろこびやすきを 満たしたまえり。

(おりかえし)

わが心しずかなり 嵐はやみて

イエスキミのみこえのみ さやかにきこゆ。

「満たしたまえり」という、もう完了です。「もう現在そうであります」ということを告白している。「これからそうしてください」ではない。「もうそうです」ということ。

2. 御霊のみたしを たまいしときに

うたがいおそれは われよりされり。

そうです。聖書を本当に読もうと思ったら、聖霊によって読ませていただかないと、人間の智慧で解き明かそうとしたって、どこかでぶつかりますよ、しっくりこない。ですから、「御霊のみたしをたまいしときに、うたがいおそれはわれよりされり」という。

3. まことに御霊は 光のごとく

心をやみよを てらしたまえり。

人間の力ではどうにもならない。心の闇を、あるいは不安、恐れ、そういったものを全部消し去ってくださるのは御霊様、聖霊です。

4. 御霊の満ちたる ころのうちに

主はそのみかおを うつしたもうなり。

(おりかえし)

わが心しずかなり 嵐はやみて

イエスキミのみこえのみ さやかにきこゆ。



本当にそうだと思いますね。私も、顔を見たことはないですよ、聖霊とか、イエスのお顔を心の中で見たことはありませんけれども、気持ちはわかります。これが私達の日々の生活であってほしい。私は今年のいわば課題として、モットーとして、

「聖書を生きる、キリストを生きる」

ということを掲げました。これは常にそうですよ。もうこれでよろしいということはありません。それは深まることはあっても、止むことはない。そう思っている。皆さんはここで証言してくださるときも、

『聖書を生きる、キリストを生きる』は、私にはこういうことでした。私はこういうことを発見しました。御言のここが物凄くインパクトが強くて、私に迫ってきました」

とか、そういう「聖書を生きる、キリストを生きる」ということが、皆さんの生活の中で「こんなふうな素晴らしいことでした」という証言を——何も体験として不思議なことが起こらなくても——

「この御言が私を捕まえて離さないんです。どうぞ、皆さん、この御言に一緒にあずかってください」

と言つて、ご披露する。そうでしょ。「この飯屋はごつつう、うまいんや。みな行こう」なんてよくありますよ。「あそこのお菓子は特別うまい。行こう」と。行ったら店の前行列が並んでいる。そうなふうに、御霊が欲しくて集会場の前に行列をつくっていて、

「この集会場はいつぱいで入れないから、映画館みたいに入れ換えをやろう」

なんて、入れ換えをやつて集会場がいつぱいになる。そんなことを私は夢みている。「年寄りも夢を見る」と使徒行伝に書いてあるものね。

●ヨエルの預言

はい。使徒行伝のほうへ行きましょう。2章17節、ヨエルの預言のところですよ。こんなのを、「今だつてそのとおりですよ」という気持ちで、皆さん、読んでくださいね。

「17「神いい給わく、末の世に至りて、

常に「末の世」です。

我が霊を凡ての人に注がん。

この「凡ての人」というのは、「オール」(all)ではなくて、「エブリボデイ」(everybody)という「一人ひとり」にという「すべて」だと思います。

汝らの子女は預言し、汝らの若者は幻影を見、なんじらの老人は夢を見るべし。^{むすこむすめ} 18その世に至りて、わが僕・婢女にわが霊を注がん、^{まぼろし} 彼らは預言すべし。

^{はしため} 19われ上は天に不思議を、下は地に徴をあらわさん、即ち血と火と煙の氣とあるべし。^{いちじ} 20主の大なる顕著しき日のきたる前に、日は闇に月は血に変らん。



天変地異ですね。そういうことが起こるだろう。しかし、

²¹すべて主の御名^{みな}を呼び頼む者は救われん」(使徒2・17、21)

旧約聖書に「ヨエル書」というのがあります。こういうふうにして終始一貫、旧約聖書も新約聖書も、神の霊が導いていく。神の霊の御業^{みわざ}、それがモーセをとおして顕されたりとかいろいろです。それが新約ではイエス・キリストをとおして顕される。そしてそのイエス・キリストが私達にとつての助け主、慰め主、真理の御霊となつて我らの中に働いてくださる。旧約の世界では、神の霊と人間との間に隔たりがある。神の霊が働いても、一つになれない。人間の罪がじゃましているから。ところが、キリストは私達を完全に罪から解き放つて、聖なるものとしてくださいましたから、聖とされたものの中に神の霊が、キリストの霊、聖霊が降ってくださる。十字架できれいに掃除したあと、放っておいたら、変な霊がいっぱい入ってくるかもしれない。

「あつ、きれいになっている。これは都合がいいと言って、前よりももっと酷^{ひど}

いものが入ってくる」

と、ちゃんと福音書の中でキリストは言っておられる。十字架でゼロにされると、そこへ間髪を入れず、聖霊という聖なる霊が宿ってくださる。だから、小池辰雄先生は、十字架を聖霊の○で包まれた(○の中に十)図を描いた。

「十字架と聖霊は切つても切れません。切り離したらだめですよ」

と言われた。「十字架、十字架」と言っていて、聖霊のことがぬけているのはだめだし、十字架なしに「聖霊、聖霊」と言つて、霊のことばかり追い求めていると、変てこな霊が入ってくるかもしれない。だから、十字架でゼロにされているところに、聖霊という無限無量が入ってくる。そういうことをはつきり告白される牧師さんがどれだけいらつしやるかわかりませんが、小池先生はそういうことを非常にはつきりと断言してくださいます。これは非常にありがたいことだと思っています。

●小冊子『聖霊・助け主・真理の御霊』の「あとがき」

ついでながら、今から12年前にこういう本を出しました。『聖霊・助け主・真理の御霊』(2007年聖霊降臨節集会、2007/9/6発行)、これは堀尾さんが作ってくださいったんです。私は昨晚、ちらちらと読んできたんですけれども、なかなか大事なことがきちんと書かれています。逆にいうと、それからちつとも進歩していないということになります(笑)。実にこれはうまくできてます。そこにこんなことを書いています。まずは、「あとがき」というところで堀尾さんがお書きになったところをちょっと紹介します。

《あとがき

四国キリスト召団 堀尾夕起子

親友に誘われるままに初めて奥田昌道先生の家家庭集會に寄せていただいた日から、



二十年近い歳月が過ぎました。その間、本当にいろいろなことがありました。嬉しいこともありました。それよりは、困難なこと、傍目には試練と見えることのほうがずっと多くありました。今あらためて振り返ってみると、そのような試練のたびに主様のものと連れ戻され、主様に様々な思いをぶつける中でより深く主様に結ばれ、そして新たな歩みへと押し出される、その繰り返しだったような気がします。

主様というのは、本当に不思議な方です。私の少し先を歩きながら背中であげてくださることもあれば、私のすぐ側で「ここで見ていてあげるから、大丈夫、自分でやってごらん。」と言ってくださることもありました。私の中で私の心とひとつになり、言葉にしたくてもできない私の思いを感じ取り、孤独から私を救ってくださったこともありました。私が大きな手術を受けた時は、人の手が届かない体内の傷を内側から御手で包み、痛みを和らげ、癒してくださいました。それらのことは、いずれも大きな恵みでした。

そのような主様とのふれあいの記憶の中でとりわけ深く胸に刻まれているのは、ある試練について「なぜなのでしょう。」と主様にどんなに訴えても、ずっと沈黙したままでも何も答えてくださらなかったことです。待ち続けたその答は、その試練から二十年以上の月日が経った後、予想だになかったある出来事を通して突然に与えられました。おそらく主様は、私に答を示してよい「とき」を忍耐強く待つておられたのだと思います。私が切に答を求めていることをよくよく知りながら、それでも沈黙を守り、私に答を示してよい本当の「とき」が来るまでじっと待ち続けてくださった主様は、きっと私と同じくらい辛かっただろうと思います。

待つても待つても主様からの答が得られなかった間、それでも主様から離れずに生きて来ることができたのはなぜなのか。ひとつには、折に触れて主様が様々な恵みを私にくださったからです。しかし、それだけではその時々への感謝でおわってしまい、本当の意味で主様の御手の中にとどまっていることはできなかっただろうと思います。主様と私を結ぶ本質的な『何か』が存在し続けてくれたから、どんなに精神的に辛いときも、天に対する不信が芽生えかけたときも、私は主様から離れずに踏みとどまれたのだろう……漠然とそのように感じていたところ、このたびのペンテコステのご講筵を聴く機会をいただきました。「聖霊、助け主、真理の御霊。そして、その本質は愛、この奥田昌道先生のひとことと、すべてのことがすつと腑に落ちた心地がしています。

ペンテコステのご講筵のテープを繰り返し聴き、そのひとことひとことを心にかみしめるうちに、このテープを書き写したくなりました。そのようにして生まれたご講筵録を、主様はこの冊子の原稿として用いてくださいました。主様の御思いの深さに感謝しています。》

それに私は「付記」というのを付けています。



《付記

奥田昌道

この講筵録の成り立ちについては、「あとがき」で堀尾夕起子さんが書いてくださっています。少し補足いたしますと、今年の5月27日、京都キリスト召団の聖霊降臨節集会に徳島の地から堀尾さんが馳せ参じて下さいました。そしてお帰りになってちょうど一か月後、思いがけない大きな手術をお受けになりました。その病床で繰り返し聴いてくださったのが聖霊降臨節集会の講筵テープだったのです。そして、ぜひその内容を文章にし、小冊子の形にしたいと願われて、この小冊子ができ上がりました。

堀尾さんは先にも、2003年のクリスマス講筵「光・愛・生命——クリスマスの恵み——」を小冊子に仕上げて下さいました。

わたしたちは、主イエス・キリストを「主様^{しやさま}」と呼んでいます。そして、祈りにおいても、「主様！」とか、「主イエス・キリスト様！」と呼びかけます。身近かにいらつしやるお方として、親近感をもってお呼びすることができるようです。

「主様」という表現は、一般の方や教会員の方々にはなじみのない呼び方かもしれませんが、おゆるしいただきたく存じます。

おわりに、講筵の文章化にあたって、適当に「小見出し」を付したり、行間を空けたり、こまやかな心くばりをして読み易い形にしてくださいました堀尾さんのご愛労に心から感謝いたしますとともに、熱い祈りのこめられたこの小冊子が善く用いられますように心からお祈りいたします。 2007年8月12日《

5月27日にここへおいでになって、そしてこれを作ってくださいました。それに対して私が「付記」を書いているのが8月27日ということなんです。発行しましたのが、「2007年9月6日発行」となっています。そして、小見出しが十幾つあるんです。

《ペンテコステとは／聖霊を受ける人／キリストの受洗／聖書を読むということ／目に見えないものが大切／天と地／新しく生まれる／聖霊は永遠の生命／信じるということ／二重性を貫く本質／霊に従って生きる／とりなしの祈り／祈りとは／キリストの熱愛／ヨハネ伝に隠されている十字架／聖霊、助け主、真理の御霊／ロマ書における根源現実／ひとりひとりがその人らしく／祈禱》

と、全部なかなか魅力的なタイトルがそれぞれ小見出しで付いているわけです。

2007年5月27日の特別集会、ペンテコステ集会。だから、12年前ということになる。全然進歩しておりません、自分自身。というようなことを思いますけど、がっかりすることはない。新約聖書を見てごらん。二千年前です。あのキリストのおられた時代、そしてキリストの直弟子たち、迫害も激しくなりました。ユダヤ人からの迫害、それからネロなどその当時の政治権力からの迫害。その中でキリストの生命が伝えられ、聖書が遺されていったわけです。



自然科学の世界は無限に進歩していきます。ところが、この霊の次元はキリストのおられたときが最高なんです。だから、そこへ戻ればいい。よく、小池先生が、

「使徒的信仰に還れ^{かえ}」

ということを言われた。キリストのところへ帰れと。あの時代が最高なんです。旧約の集大成であり、そしてその後、新約に至る導きの星となって、そして終末に向かっていく。そして、終りがくる。そういうことですから、自然科学は「進歩、進歩、進歩」と言うけれども、そのうちに火星へ行ったりどこへ行ったりして、どうなるのか知りません。でも、それはこの地上の問題です。聖書が追求しているのは霊の次元、天の次元ですから、これは自然科学では無理です。分野が違うから。地上のことをどんなに微に入り細に入り——遺伝子だ何だと——いろんなものを分析、解析しても、霊の次元とはまた別なんです。だから、私たちは何も心配しないで、キリストが最高のお方ですから、

「キリストの時代に帰れ」

と、そういう気持ちでいく。「帰れ」ということは「その時代を自分のものにしろ」ということ。逆に言うと、

「あの時代に輝いていたものを今こちらに下さい。あの時代と同じように、いやそれ以上に今輝かしてください」

と、そういう祈りだと思う。「自分を立派にする」とか、そんなのではない。これは器、入れ物なんです。

「われ土の器に宝を持てり」（コリント後4・7）

とパウロは言いました。

クリスチャンは明るい顔をしていてください。いつかもし言いましたね、ドイツで私の恵子がお別れに際して——四か月ほどドイツの学校に通っていました——「笑う門^{かど}には福きたる」というのをドイツ語で書いた。「笑う門^{かど}」というのは、どうやって笑えるんですか、この悲しみ尽きざる苦しみが多い世にあつて。同じ次元におつたら笑えない。この地上は嬉しいことよりも痛ましいことがいっぱいあります。ニュースを見ても。でも、それを突き抜けて、にも拘らず、キリストが宿つてくださるところに平安があり、生命があり、^{よろこび}歓喜があり、地上を突き抜けて行くという、そういう次元へと私達は招かれ導かれている。それを実証していく。そういう役目が、我々のキリストの証人^{あかしびと}としての役目ではないでしょうか。

「すべて世は事も無し」と、そういうところでは皆がニコニコとしているでしょ。ロバート・ブラウニングの詩（「春の朝」）に、

「時は春、

日は朝、

朝は七時、



片岡に露みちて、
あけひばり
揚雲雀なのりで、
かたつむり
蝸牛枝に這ひ、
神、そらに知ろしめす。

すべて世は事も無し。」（上田敏訳・「海潮音」より）

とありますが、そういうのは地上には来ませんわ。今は、世界中のあちこでいろんなテロがあつたり、内戦があつたり、疫病がはびこつたり、いろんな悲惨ことがある。また、地震や災害があるでしょ。それから、北極も南極もだんだん氷が溶けだしてどうなるかわからない。そういうふうには、絶対安心とか希望とか、そういうものは見出し難い世でありながら、しかし、私達はそれを乗り越えて、常に平安があり希望があるという。それはキリストという希望の実体をいただいているから。

「此等のことを汝らに語りたるは、汝ら我に在りて平安を得んが為なり。なんじら世にありては患難あり、されど雄々しかれ。我すでに世に勝てり」（ヨハネ16・33）

と、キリストが弟子たちに語られた最後の言葉です。

「なんじら世にありては患難あり、されど雄々しかれ。我すでに世に勝てり」と、そんなふうに私は日々思っております。

●使徒行伝1章、2章

使徒行伝の1章3節から辿っていきましょう。

「3 イエスは苦難をうけしのち、多くの慥なる証をもて、己の活きたることを使徒たちに示し、四十日の間、しばしば彼らに現れて、神の国のことを語り、⁴ また彼等とともに集りいて命じたもう『エルサレムを離れずして、我より聞きし父の約束を待て。⁵ ヨハネは水にてバプテスマを施ししが、汝らは日ならずして聖霊にてバプテスマを施されん』

⁶ 弟子たち集れるとき問いて言う『主よ、イスラエルの国を回復し給うは此の時なるか』⁷ イエス言いたもう『時また期は父おのれの権威のうちに置き給えば、汝らの知るべきにあらず。⁸ 然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極にまで我が証人とならん』⁹ 此等のことを言い終りて、彼らの見るがうちに挙げられ給う。雲これを受けて見えざらしめたり。¹⁰ その昇りゆき給うとき、彼ら天に目を注ぎいたりしに、視よ、白き衣を著たる二人の人かたわらに立ちて言う、¹¹ 『ガリラヤの人々よ、何ゆえ天を仰ぎて立つか、汝らを離れて天に挙げられ給いし此のイエスは、汝らが天に昇りゆくを見たるその如く復



きたり給わん』¹²ここに彼等オリブという山よりエルサレムに帰る。この山はエルサレムに近く、安息日の道程^{みちのり}なり。

安息日は、移動する距離に制限があった。ちょうどその制限にぴったりぐらいの距離だったという。

¹³既に入りてその留^{とどま}りおる高樓^{たかどの}に登る。ペテロ、ヨハネ、ヤコブ及びアンデレ、ピリポ及びトマス、バルトロマイ及びマタイ、アルパヨの子ヤコブ、熱心党のシモン及びヤコブの子ユダなり。¹⁴この人々はみな女たち及びイエスの母マリヤ、イエスの兄弟たちと共に、心を一つにして只管^{ひたすら}いのりを務めいた。』

(使徒1:3-14)

それから少し飛ばします。ユダが裏切ったから、その代りを選ばなければいけないということで、抽選でヨセフとマツテヤの二人——23節のところに出てきます——その二人のどれかを選んでくださいと祈った。くじ引きしたら、マツテヤに当たった。それが十一の使徒に加えられたということが挿入されています。

そして第2章へいきます。「五旬節」というのは——「旬」というのは十日でしょ——五十日目ということ。キリストの復活された時から五十日目。だいたい、計算すればそれで合います。四十九日の次の日、七週間の次の日です。「復活節」は年によって動きますから、年によって違うわけです。復活節は、春分の次の満月があつて、その次の日曜日となつてゐる。春分の日はだいたい3月21日頃です。その春分の日があつて、その次に満月がきます。その満月の次の日曜日が復活節ということになる。それを基準にして七週間後の五十日目「ペンテコステ、聖霊降臨節」となる。その記事がこの第2章です。

「五旬節の日となり、彼らみな一処^{ひとところ}に集い居りしに、²烈しき風の吹ききたるごとき響き、にわかに天より起りて、その坐する所の家に満ち、³また火の如きもの舌のように現れ、分れて各人の上にとどまる。

皆さんが集まっていた。その時に、集団にくだった。と同時に一人ひとりにくだった。両方同時なんです。独りで祈っている時に降ることはいくらでもあるそうですよ。小池先生も、九州で聖霊のバプテスマをお受けになつて、それから東京へ帰つてから、二回目の聖霊体験をなさった。その時は、本当に「畳の上に平伏した」とお書きになっています。それを導いたのが、あの

「幸福^{さいわい}なるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

という聖言だった。自分はなかなか霊が貧しくなれない。キリストは霊が貧しい。「霊が貧しい」というのは、「自分のものは何ももたない」ということ。自分は空っぽなんです。では、何があつたか。空っぽなるイエスの中に神さまが100%宿っていた。だから、

「私を見た者は父を見たのである。私は自分からは何もできない。私の中で父が御業をなさっている」



と。「0∞」、ゼロの中に神さまという無限大(∞)が宿つていると言う。それで、

「私を見た者は父を見たのである」

と仰っています。あんなことはキリストしか言えないことですよ。

我々はどうなのか。空っぽにならないですね。常に自分があつて、じゃましています。自我というものがじゃましています。「私が、私が、私が」と。「私の信仰は、私は何々」と、常に「私は、私は」と言う。キリストは「私」があらへんです、空っぽなんですね。父なる神さまがすべて、オールなんです。だから、

「私を見た者は父を見た。父と私は一つである。」

と言われた。「神を冒瀆する。けしからん！」と、パリサイ人は怒ったけれども、イエスというお方にとっては、それがナチュラルだったんでしょね、きつと。それはやはりあの方は聖霊によつて生まれたお方だから。そう思います。我々はそうはいかない。キリストにはストレートに來た神の霊、それが我々はその前に一段階通らなければならぬものがある。それは「自我」というものが——「肉」とも呼ばれ——邪魔をしている。これは生物としてはしょうがないでしょうね。生物体というのは自己保存本能があるでしょ。まず自分を守りますよね。でも、そういう自己保存本能のある人間でありながら、母性本能というのがまたあつて、それは自分を犠牲にしても子どもを守るという、素晴らしいものも宿っている。女性にはですよ、男性はしりません。時々そういう男性もいますけれども。女性はもう本能的にわが子をかばう。

「お腹の中にいたんだもの。私の一部だったんだもの」

という、そういう自負心があるのでしょうか。もうこっちはわからない。うらやましいだけです。

「いや、私の子どもに限っては。私のお腹を痛めた子ども。十か月も私の中にいた、一部だったんだから」

と。そういう母親のすごい愛情というかな。そうでしょ、一つだったんだから、それが二つになっただけでしょ。キリストも神さまと一つ。それが別々のお方になる。なにかそんな感じがする。だから、男性なんてのは指をくわえているだけですわ。でも、聖霊が来てくださるときは、そんな男性・女性の区別なし。肉体、肉の人間としては、生物体としてはいろいろ役割があるから、別々なんだけれども、こと聖霊の世界では、そんな区別はありません。

この2章でもそうでしょ。なにも男性ばかりが集まっていたわけではないと思う。

4 彼らみな聖霊にて満され、御霊の宣べしむるままに異邦の言にて語りはじむ。

たくさんの方が集まっていたようですね。ところが、異言で祈っている人たちは、自分で何を祈っているかさっぱりわからない。けれども、周りに居る人からは、「あつ、自分の国



語である人はしゃべっている。この人は私の国言葉でしゃべっている」と、実に不思議だったようです。そして、ペテロの演説があります。

14ここにペテロ十一の使徒とともに立ち、声を揚げ宣^のべて言う『ユダヤの人々および凡てエルサレムに住める者よ、汝等わが言^{ことば}に耳を傾けて、この事を知れ。15今は朝の九時なれば、汝らの思うごとく彼らは酔いたるに非ず、16これは預言者ヨエルによりて言われたる所なり。17「神いい給わく、末の世に至りて、我が霊を凡ての人に注がん。汝らの子女は預言し、汝らの若者は幻影^{まぼろし}を見、なんじらの老人は夢を見るべし。18その世に至りて、わが僕・婢女にわが霊を注がん、彼らは預言すべし。……21すべて主の御名を呼び頼む者は救われん」

そして、イエスのことを証言しました。

22イスラエルの人々よ、これらの言を聴け。ナザレのイエスは、汝らの知るところ、神かれに由りて汝らの中に行い給いし能力^{ちから}ある業^{わざ}と不思議^{しるし}とを以て、汝らに証し給える人なり。23この人は神の定め給いし御旨^{みむね}と、預^あめ知り給う所とによりて付^{わた}されしが、汝ら不法の人の手をもて釘磔^{はりつけ}にして殺せり。24然れど神は死の苦難^{くるしみ}を解きて之を甦^{よみが}えらせ給えり。彼は死に繋^{つな}がれおるべき者ならざりしなり。

この人は十字架にかけられてしまった。しかし、神さまはこの十字架の死の苦しみを解き放つて甦らせ給うた。この方は死ぬような方ではなかった。ゆえあつて死を味わわなければならない、死につばなしなんて、この方にとってはあり得ないことだったと。

そして、32節へ飛んで、

32神はこのイエスを甦えらせ給えり、我らは皆その証人なり。

「神は甦えらせた」とありますけれども、更に言えば、イエスの中に隠されていた本質が今、忽然と現れた。十字架で罪の贖いをなさつて、役割をはつきり果たし終えられた。そこでそのお方の本質が今、燦然^{さんぜん}と現れてきた。これが人々が「復活」と呼んでいる現象にすぎないわけです。「死人が息を吹き返した、元のイエスになった」と、そんなのではない。霊体となって現れてくださったわけですから。そして、天に昇つていかれて、約束の聖霊をお降しになった。

●イザヤ書64章

「約束の聖霊」ということになりますと、これはヨハネ伝14章に「約束」が出てますが、その前にイザヤ書64章を引いておきます。

「願くはなんじ天を裂きてくだり給え

凄いでしょ、「天を真つ二つに裂いてでも降つてきてください」というイザヤの祈りです。



なんじのみまえに山々ふるい動かんことを

モーセが十誠を受けます時にも、山々が震い動いて非常に恐ろしい情景だったということですが、ここではそれも連想しながらかもしれないかもしれませんが。

2 火の柴をもやし火の水を沸かすがごとくして降りたまえかくて名をなんじの敵にあらわし もろもろの国をなんじのみまえに戦慄^{ふるいおの}かしたまえ³
汝^{みまえ}われらが逆料^{はかり}あたわざる懼^{おそ}るべき事をおこない給いしときに降りたまえり
山々はその前^{みまえ}にふるいうごけり⁴ 上古^{いにしへ}よりこのかた汝^{みまえ}のほか^{いか}に何なる神あり
て俟望^{まち}みたる者にかかる事をおこないしや

「俟望^{まち}みたる者」というのは、「全托する者、すべてを委ね切ってしまう全托する者」と小池先生は解説されました。

いまだ聴かずいまだ耳にいらすいまだ目にみしことなし⁵ 汝はよろこびて義をおこないなんじの途^{みち}にありてなんじを記念するものを迎えたもう

そこからは今度は、自分の民族の罪について告白します。

視^みよなんじ怒りたまえりわれらは罪をおかせりかかる状^{さま}なること既にひさし我^{われら}儕^しいかで救わるるを得んや⁶ 我儕^{われら}はみな潔からざる物のごとなりわれらの義はことごとく汚れたる衣のごとし我儕^{われら}はみな木葉のごとく枯れわれらのよこしまは暴風^{はやち}のごとく我らを吹去れり⁷ なんじの名をよぶ者なくみずから励みて汝によりすがる者なしなんじ面^{みかお}をおおいてわれらを顧みたまわすわれらが邪曲^{よこしま}をもてわれらを消え失せしめたまえり

このように、民族の現実は今も神の御意に反している、怪しからん状態である。「されど」と、ここで引っくり返っている。

8 されどエホバよ汝はわれらの父なりわれらは泥塊^{つちくれ}にしてなんじは陶工^{すえつくり}なり
「陶工^{すえつくり}」は、粘土をこねて、どんなふうにも造れるんです、尊い器にもそうでない器にも。これはエレミヤ記18章に出てきます。

我らは皆なんじの御手のわざなり⁹ エホバよいたく怒りたまうなかれ 永くよこしまを記念したもうなかれ願くは顧みたまえ我儕^{われら}はみななんじの民なり¹⁰
汝のきよき諸^{もろもろ}邑^{まち}は野となりシオンは野となりエルサレムは荒廃^{あれた}れたり

惨憺^{さんたん}たる現実ですと。

11 我らの先祖が汝を讃^ほめたたえたる栄光ある我儕^{われら}のきよき宮は火にやかれ我儕^{われら}のしたいたる処はことごとく荒れはてたり¹² エホバよこれらの事あれども汝^{みまえ}なおみずから制^{おさ}えたもうや

「どんなにくたばっても、だめになっても、罪を犯しても、やつぱりあなたの民なんです。この民を放っておかないでください」というイザヤの必死な祈りです。「これらのことがあれども、あなたは黙っておられるんですか。立ち上がってください」というわけです。



なんじなお黙^{もだ}してわれらに深くくるしみを受しめたもうや」(イザヤ64・1-12)
現実^{もだ}は慘憺たるもので、神さまの前に立てない。にも拘らず、やはり

「主よ、あなたは我々の神ではありませんか。我々をもう一度回復して、あなたの民らしい姿に、あなたの国らしい国に戻してください。それをやつてくださるのはあなたしかいないんです」

と、そういう祈りが一番始めの、

「願くはなんじ天を裂きてくだり給え、なんじのみまえに山々ふるい動かんことを。火の柴をもやし火の水を沸かすがごとくして降りたまえ」

と。

「今、現に敵に攻められ支配され、慘憺たる姿だけでも、あなたはどうぞ御業を現わしてください」

という必死の祈り。こういう祈りをキリストはしつかり受けとめて、願いを成就してください。そのように思います。

●ヨハネ伝14章

そして、ヨハネ伝14章16節から。14章は、お別れにあたって、弟子たちに語られた別れの言葉「訣別遺訓」と言われているところです。

「¹⁶われ父に請わん、父は他に助主^{たすけぬし}をあたえて、永遠に汝らと偕^{とも}に居らしめ給うべし。¹⁷これは真理の御霊なり、世はこれを受くること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕^{とも}に居り、また汝らの中に居給うべければなり。

そういうお方なんだと。これは全部、このあとに起こることの預言ですね、キリストは弟子たちに与えた。私達はそれは全部成就した。あのペンテコステで成就した。その延長線上に我々はいますから。

「彼は汝らと偕^{とも}に居り、また汝らの中に居給うべければなり」

「はい、あなたが弟子に約束されたことは全部、ペンテコステをとおして、そしてそのあとに続く我々に既に成就しております。感謝いたします」

と、そういうふう読んでいただきたい。

¹⁸我なんじらを遣^{のこ}して孤兒^{みなしこ}とはせず、汝らに來^{きた}るなり。¹⁹暫^{しばら}くせば世は復^{また}われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活くれば汝らも活くべければなり。

キリストは復活して永遠の生命を顕してください。同じように私達も、その同じ姿に化せられていく。それを既に賜っている。そうでしょ。

「われ活くれば汝らも活くべければなり」

と。キリストだけが復活して、永遠の生命を顕された。けれども、「我々は相変わらず元の



まま、そんなことではあり得ないわけです。

20 その日には、我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを
汝ら知らん。

父なる神、子なるキリスト、御霊のキリスト、そして我。

「神・キリスト・聖霊・我の四位一体」
さんみ よんみ

と、小池先生は言われた。「三位一体の神」ということは、よくキリスト教神学のほうで言われるわけです。でも、「四位一体」、これがキリストの願っていらつしやることだと。

「我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん」

「はい、そのとおりしてくださいました。ありがとうございます」と。

21 わが誠命を保ちて之を守るものは、即ち我を愛する者なり。

「キリストを愛する」とは、「御言を大事にする」ということなんです。感情的に愛するということではなくて、「御言を守る」ということが、その人のことを大切に思うということですよ。

23 イエス答えて言い給う『人もし我を愛せば、わが言を守らん、わが父これを愛し、かつ我等その許に來りて住処を之とともにせん。』

キリストの言葉を大事にするということは、御言の中にキリストはいらつしやる。そしてそのキリストの中に父なる神もいらつしやる。だから、父なる神、イエス・キリストさま、聖霊の皆さま、そして我の四者が本当に一つである。そういう実を与えてくださるという約束です。それを妨げるものが何かあるんですか。キリストがそのように祈り約束してくださった。

「はい、皆さま、それは成就しています。いよいよ成就してください」

と。私が「聖書を生きたる、キリストを生きたる」というのはそういうことなんです。「これで充分だ」ということはないと思います。いよいよ深められていく。

そういう実があつて、そして、人々のために、隣人のために、病める人のために祈る。その祈りは聴かれていくと思う。全く実がない人がいくら按手して祈ったって、それは何も起こらないと思う。やはり按手して何かが伝わっていくということは、その人自身の中にその実体が来ていなければ始まらないですよ。

福音書のイエスも聖霊を受けておられ、絶えず祈っておられるから、絶えず父の霊に満たされておられるから、不思議なことが次々起こってきます。時には眩い姿になつて変貌もしておられます。だから、水の上を歩いて行かれる。これも肉の次元を乗り越えた姿で生きていかれた、歩んで行かれたのではないかと、私は推測しています。でないとい

「五つのパンと二匹の魚で五千人以上の人を食べさせる」

なんてあり得ないことですよ。そんなあり得ないことは、仰々しく福音書が書くはずがない。それがちゃんと書かれているということ、その他不思議な御業がいつぱい起こっているこ



と。それは全く別次元の世界からキリストが働いておられる。そして、不思議なことが起こっている。神さまの眼から見たら、当然のことが起こっている。人の目から見たら、「奇蹟だ、不思議だ」と言っている。そのギャップだと思う。

今度は、我々一人びとりをキリストが捕まえて、

「そのような働きをさせる」

と約束してくださっているんですね。それを素直に受けましょうよ。起こったから何かではないですよ。でも、質的に、

「我と同じ業^{わざ}をなさん。いや、それよりも大きな業をする」

と、ヨハネ伝14章で約束してくださっていますもの。

「¹²……我を信する者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし、われ父に往けばなり。」

十字架を通して父に行く。そうすると、聖霊を降す。

¹³ 汝らが我が名によりて願うことは、我みな之を為さん、父、子によりて栄光を受け給わんためなり。 ¹⁴ 何事にても我が名によりて我に願わば、我これを成すべし。」(ヨハネ14・12、14)

こういうふう¹⁵に約束してくださっています。16節からは「助け主を与える」という何か別々なこと¹⁶みたいにあるけれども、助け主、聖霊が宿¹⁷つてくださるから今ここにあった、

「我がなす業をなし、かつ之よりも大なる業をなす」

という、それが成就していくのだと思います。それを実際に現わして行つたのが使徒行伝における使徒たちです。ペンテコステからガラツと変わった。あれはもう「聖霊行伝」と言っている。聖霊が弟子たち¹⁸に乗り移つて不思議な業を展開していかれたわけです。決して人の業ではない。それを我々にも約束してくださっている。

「助け主を与えて、永遠に居らしてください」

という。イエスという方と、これから我々に与えられる、弟子たちに与えられるという聖霊とは別々です。けれども、今、私達が受けとるときには、あのイエスという方は聖霊という姿で私達の中に宿り、私達と一つになつてくださる。そう受けとっていききたい。

「あなた方を残して孤児にはしない。必ず帰ってくる。世間は私を見ない。し

かし、あなた方は私を見る」

これは復活のことでしょう。

「われ活くれば汝らも活くべければなり」

と。そして、

「その日には、我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん」

父と御子キリストとあなた方が一体になる。そこへ聖霊も加わつてくださる。だから、四



位一体という。そういうことが約束されている。そして、「イエスを愛する、キリストを愛する」とはどういうことか。「御言を守る」ということだと。感情的に「好きだ嫌いだ」というのではなくて、「御言を守る」ということがその人を愛することだと。これは人間関係でもそうじゃありませんか。その人が最も大事にしている言葉、その人が心から告白してくれた言葉、それを大切に、それに自分を委ねていく。それが「愛」という姿ではないでしょうか。「相手を信ずる」というのはそういうことですね。言葉を大切にすることから、

「あの人は、言葉はいいけど、やっていることは無茶苦茶だ」と、これはだめです、言行一致でなくては。

そういう政治家が出てきてくれたら素晴らしい。選挙の前の公約なんて素晴らしいことをいっぱい仰っているのに、いざ当選して万才が終わったら、ガラリと変わってしまうような印象を受けます。「そうじゃないよ」と言ってくれたら、うれしいけれども。

23 イエス答えて言い給う『人もし我を愛せば、わが言を守らん、わが父これを愛し、かつ我等その許に來りて住^{すみか}處を之とともにせん。

イエスを愛するということは、イエスの言葉を大切にすること。

24 我を愛せぬ者は、わが言を守らず。汝らが聞くとおころの言は、わが言にあらず、我を遣^{つかわ}給いし父の言なり。25 此等のことは我なんじらと偕にありて語りしが、26 助^{たすけぬし}主すなわわが名によりて父の遣したもう聖霊は、

今だつたら、「聖霊という姿であなた方に宿る私は」と読み替えたらい。

汝らに万の事^{よろず}をおしえ、又すべて我が汝らに言いしことを思い出さしむべし。

27 われ平安を汝らに遺^{のこ}す、わが平安を汝らに与う。わが与うるは世の与うる如くならず、なんじら心を騒がすな、また懼^{おそ}るな。

聖霊という姿となつてあなた方の中に宿る私は、私が福音書の中で語っておいたことを全部思い出させる。それだけではない。平安を与える。これが私は本当に大好きです。平安があるということ。あらゆる奇蹟的なことが起こらなくても、常に心に平安があるということ。それが聖霊をいただいている証ではないかというふうに私は思います。しかも、その平安は何がきても奪われない平安である。それを言ってくださっている。

●ヨハネ伝15章

15章へ行きますと、今度はその聖霊によってイエスというお方と一如一体とされた者たちの姿を表してくださっていると思います。15章4節、

「⁴我に居れ、さらば我なんじらに居らん。枝もし樹^きに居らずば、自ら果^みを結ぶこと能わぬごとく、汝らも我に居らずば亦然り。

葡萄の樹と葡萄の枝、これはもう一体になっている。枝が本体の樹から分離されますと、



枯れてしまう。全く役に立たない。しかし、本体としつかり結び合わされていますと、そこに生命の樹液が流れますから、豊かな実を結んでいくということです。

⁵我は葡萄の樹、なんじらは枝なり。人もし我におり、我また彼におらば、多くの果を結ぶべし。汝ら我を離るれば、何事をも為し能^{あた}わす。⁶人もし我に居らずば、枝のごとく外に棄てられて枯る、人々これを集め火に投げ入れて焼くなり。

私から離れたら何もできないんだよと。

⁷汝等もし我に居り、わが言^{ことば}なんじらに居らば、何にても望みに随^{したが}いて求めよ、さらば成らん。

私の中におり、私の言葉があなたの方の中に生きているなら、どんなことでも願い求めてごらん。私がそれを叶えるからと。ヘブル書の11章1節に、

「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実^{まこと}とするなり。」

「望むところ」というのは、むやみやたらに勝手に望むのではない。御言に基づいて望むところを確信する。キリストの言葉に基づいて、そして望むところを確信し、まだ見てない、実現していない、けれどもそれは実現したのと同じですと。まだ見てない。けれども、それは必ず成りますと。そうやって先取りしていく。そういう姿だという。

「なんじ既に癒えたり!」

と仰つたら、全然、体は癒えてなくても、

「はい、ありがとうございます。私はもう根源的に癒えています。ありがとうございます
います」

そうやって受けとつていく。癒えないかもしれないませんが、現象面では。いつそれが現象面で現れるか、そんなことはもうこつちの問題ではない。御意なんです。御意次第なんです。さつきの堀尾さんの文章にも、

「思わぬ時に成就してくださった。その「とき」というのは自分の思う思いを越えて、
ときの満つるのを待つてくださっていた」

ということをお書きになっていました。そういうふうには、我々は御言を「然り、アーメン」と受けとればそれでいい。「現象面に現れたから祈りが聴かれた。現れていないから聴かれていない」とか、そんなふうに思つたらおかしい。

「祈りたることは既に聴かれたりとせよ」

と仰つたのは、「現象面で現れようと現れまいと、祈らないではいけない。願わないではいけない」と、それでいいのではないのでしょうか。

⁷汝等もし我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望みに随^{したが}いて求めよ、さらば成らん。⁸なんじら多くの果を結ばば、わが父は栄光を受け給うべし、
而して汝等わが弟子とならん。



そういうことが成就している、それが本当の弟子だよと。

9 父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。

「ヨハネの手紙」は愛の手紙です。

「神は愛なり」

とか、

「愛というは、我ら神を愛せしにあらず。神われらを愛し、御子を我らのために贖いの供物として与えてくださった。そこに愛がある」

とか、ヨハネの手紙とヨハネ伝は響きあっていますね。

「父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ」

と。「わが愛に居る」ということは、「御言を守る」ということ。イエスの御言を守る。そのことが「愛に在る」という姿である。

10 なんじら若しわが誠命をまもらば、我が愛におらん、我わが父の誠命を守りて、その愛に居るがごとし。11 我これらの事を語りたるは、我が喜悅の汝らに在り、かつ汝らの喜悅の満たされん為なり。

これらのことを語ったのは、あなた方の中に喜悅が満ちるためだと。そして、誠命、イエスの言葉は何か。

12 わが誠命は是なり、わが汝らを愛せしごとく互に相愛せよ。13 人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし。

私があなた方を愛したように——キリストは本当に弟子たちを極みまで愛されました——そのように互いに愛し合いなさいと。

「わが汝らを愛せしごとく」という言葉で、思い出しますのは、あのヨハネ伝13章です。

「1 過越のまつりの前に、イエスこの世を去りて父に往くべき己が時の来れるを知り、世に在る己の者を愛して、極まで之を愛し給えり。

去って行くにあたって極限まで弟子たちを愛されたという。そして、

3 イエス父が万物をおのが手にゆだね給いしことと、己の神より出でて神に到ることを知り、4 夕餐より起ちて上衣をぬぎ、手巾をとりて腰にまとい、5 尋で盥に水をいれて、弟子たちの足をあらひ、纏いたる手巾にて之を拭いはじめ給う。6 かくてシモン・ペテロに至り給えば、彼いう『主よ、汝わが足を洗い給うか』7 イエス答えて言い給う『わが為すことを汝いまは知らず、後に悟るべし』8 ペテロ言う『永遠に我が足をあらひ給わざれ』イエス答え給う『我もし汝を洗わずば、汝われと関係なし』(ヨハネ13・1〜8)

ペテロは、

「あなたに洗ってもらうなんてとんでもない。弟子が先生の足を洗うのは当たり前だけれども、先生に洗っていただくなんて、おそれおおくてできません。」



と言って断りました。「永遠に洗わなくてください」なんて言った。ところが、イエスは、「だったら、あなたと私はもう関わりなくなるよ。私がお前の足を洗う。そしてお前と一つになる。そこで私とお前との関係は成り立っているのに、それをしなかったら、あかの他人になってしまうのではないか」と、そんなようなお気持ちだと思う。

「イエスこの世を去りて父に往くべき己が時の来れるを知り、世に在る己の者を愛して、^{きわみ}極まで之を愛し給えり。」

と。この世を去って父に往くべき自分の時がきた。そこで世に残る者たちを愛して、極みまでこれを愛したもうた。そして、

「己の神より出で神に至ることを知り」

という。皆さん、どうですかね。もうこの世を去ろうとする時に、周りに何人か集まってきました。どんな言葉を遺すでしょうね。

13章にこう書いてあって、そして14章からはずっと御言が並んでくるわけです。14章から16章までを一挙にお話しになったのか、それまでに語られたことを綴り合わせたらこうなったのか、それは知りませんが。我々はこの14章から16章までにいかにイエスが弟子たちのことを、そして弟子たちに続く私達一人ひとりのことを大事に思っていたらっしゃるか。しかも、私達を本当にキリストの弟子たらしめるものは、我々の側の信仰とかいうのではなくて、聖霊なんです。

「聖霊汝らにくだる時、汝ら力を受けん。そして、世の終りまでわが証人^{あかしびと}とならん」

と約束されましたように、人間の側の熱心とか、そういうもので続いていくものではないということ。だから、信そのものの、イエスを信ずる信そのものも賜物^{たまもの}なんです。十字架も賜物です。信仰も賜物です。聖霊も賜物です。すべて我々がいただくものは全部、賜物なんです。「賜物」というのは、「お前は立派な者だから、上げる」とか、理由があるのではない。無条件に

「わが意^{こころ}なり、かく成れ！」

と。癪病人に向かつて、

「わが意^{こころ}なり、潔まれ！」

と仰った。そうじゃないでしょうか。相対的にひねくれている人には、すぐには聖霊は来ない。いわんや、イエスを足蹴にしている人には絶対に来ない。それはあります。だから、我々は自分の在り方としても、謙虚な心で、平伏^{ひれふ}しの心で、己を誇ったりなんかというのではなくて、

「こっちは何もありません、こっちはゼロでありたい。主よ、あなたがすべてです」という、謙^{へりくだ}りの心で祈り求める。



「求めの切なる祈り、必要なものは与え給う」と、ありますように。こっちは本当に自分で、

「あなた以外には、本当に私を活かしてくださいるもの、御意にかなうような生活をさせてくれるものはいんです」

と。イザヤ書にあったように、

「どうぞ、天を裂きて降りたまえ！」

という気持ちで祈ることは必要です。飢え渴いている者のところに降ってきてくださる。

「恵^{さいわい}福なるかな、霊の貧しき者」

という。

「あなた以外に私を本当の意味で満たしてくれるお方はいらっしやいません」

という、そういうふうな飢え渴いた切なる求め、

「求めの切なる祈りに、必要なものは与えてくださる」

とある。聖霊というお方は、

「本当に、主よ、あなたの聖霊が来てくださらなければ、私は自分ではどうにもなりません」

という、人間の側からいうと、そういう思いでいる姿。そのときに、

「心配いらん。十字架でお前はすっかり片付いているんだ。お前は自分のことで何も心配しないでいい。でなかったら、私の十字架は無意味になってしまうではないか。お前は十字架で完全にゼロ、罪無き者、義人、神に喜ばれる姿になってしまっている。でなかったら、十字架というのはそれほど無力なのかね。」

と。

「十字架の言は亡ぶる者には愚かなれど、救わるる我らには神の能力^{ちから}なり」

と、コリント前書1章18節にあります。そうでしょ。神の力だ。人ができないことを十字架はしてくださったと。それをガラテヤ書では、

「われ主と共に十字架せられせたり。」

十字架されたら死んでいますね、

もはやわれ生きるにあらず。御霊のキリスト、復活のキリストがわがうちに

ありて生き給うなり」(ガラテヤ2・20)

と。それが我々の現実なんです。それが本当の自分だ。あなたの本当の姿はそれだと。そのところへ御言が臨んできますと、どんどん入ってくるんですよ。その場でなかったら、御言とは水と油みたい拒絶反応で跳ね返しますから、御言は宿りません。

祈りは大事ですよ。でも、祈りは大事だけれども、その根底には、

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず。もう旧き我は、主よ、あなたの十字架が片付けてくださった。だから、どうぞ、聖霊の主さま、復活さ



れた主さま、ヨハネ伝で約束された主さま、助け主なる主さま、どうぞ、わがうちにお宿りください」

と、それが私の場合の祈りですね。

御言から離れていたたり、聖書を一週間でも開かないでいたら、それはちよつと申し訳ないですね。「ちよつと敷居が高くなりまして」なんていうことになってしまっています。

皆さん、一週間の断食なんてなさらないでしょう。私は、一食ぐらい忘れて抜いていることがあります。それは忘れて抜いているので、意図的に断食するなんてしたことがない。それと同じように、御言にふれないで二、三日過ごしてごらん。なんとなくおかしいですよ。なんとなくしつくりこない。それが御言を、聖書を開くと、

「あつ、これが私の楽しみの故郷。われ魂の故里に帰りきたれり」

と、そういう思いになる。皆さん、どうですか。一週間、聖書を読まないで平気ですか。そんなことあり得ないと思うんですね。

だから、私はどこへ行く時にもこの小型の聖書、「新約聖書（詩篇付き）」を肌身離さずくらの気持ちでおります。そしていつも言いますように、カラフルにしてくださいね。傍線を引く、赤線を引く、マーカーの黄色を塗る、上に線を引く、下に線を引く、時には囲いこむ。そういうお化粧をする。真つ白の聖書はあまり感心しない。キリストは

「我をくらい、我を飲め」

と仰ったでしょ。

●使徒行伝20章

今日はペンテコステですので、聖霊が降ってきてくださって初めて、弟子たちは本当に歩きました。使徒行伝1章のところに、

「⁴また彼等とともに集りいて命じたもう『エルサレムを離れずして、我より聞きし父の約束を待て。⁵ヨハネは水にてバプテスマを施ししが、汝らは日ならずして聖霊にてバプテスマを施されん』⁶弟子たち集れるとき問いて言う『主よ、イスラエルの国を回復し給うは此の時なるか』⁷イエス言いたもう『時また期は父おのれの権威のうちに置き給えば、汝らの知るべきにあらず。⁸然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極にまで我が証人とならん』」（使徒1・4・8）

こういう約束を下さっていますね。それから第2章でこの五旬節の日に聖霊が天から降ってきたという。そして聖霊で満たされて、みな異言で神を讃美し始めた。そういうことが出てきました。それから、3章以下ですね、ペテロやヨハネが聖霊の力でいろんな奇蹟的な御業を展開しています。だから、この使徒行伝というのは別名「聖霊行伝」、聖霊が弟子



たちをとおして働いていかれた記録ということになります。使徒行伝は、どうぞ皆さん、しっかりと読みになってくださいね。

そして、最後に使徒行伝20章17節のところから読んでいきます。

「¹⁷而してパウロ、ミレトより人をエペソに遣し、教会の長老たちを呼びて、¹⁸その来りし時かれらに言う『わがアジアに来りし初めの日より、如何なる^{さま}状にて常に汝らと偕に居りしかは、汝らの知る所なり。¹⁹即ち謙遜の限りを^{はかりごと}つくし、涙を流し、ユダヤ人の計略によりて迫り来し艱難に耐えて主につかえ、²⁰益となる事は何くれとなく憚らずして告げ、公然にても家々にても汝らを教え、²¹ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対して悔改め、われらの主イエスに対して信仰すべきことを証せり。²²視よ、今われは心擲められてエルサレムに往く。彼処にて如何なる事の我に及ぶかを知らず。²³ただ聖霊いずれの町にても我に証して、^{なわめ}縲紲と患難と我を待てりと告げたもう。

非常な患難が待っているということをやんと聖霊が教えてくださっている。にもかかわらず、自分はエルサレムへ絶対^{みちのり}にのぼるんだということを言っている。

²⁴然れど我わが走るべき道程と、主イエスより承けし職、すなわち神の恵みの福音を証する事とを果たさん為には、固より生命をも重んぜざるなり。

この心意気ですね。

²⁵視よ、今われは知る、前に汝らの中を歴巡りて御国を宣伝えし我が顔を、汝ら皆ふたび見ざるべきを。

これはもう最後のお別れだよと。

²⁶この故に、われ今日なんじらに証す、われは凡ての人の血につきていさぎよし。

これは、

「自分があの人に伝えておけばあの方は救われたのに、それをさぼっていたためにあの方はついにいわば罪のまま死んでいつて天国に入れない。その責任をあなたに問うよ」

という、エゼキエル書に出てきている言葉なんです。これはさぼっている罪なんです。「あなたがさぼっているためにあの方は亡びていく。その責任をあなたに問うよ」という、ちよつと恐ろしいことが書かれている。それに対して、

「自分はもうやるべきことは全部やった。だから、亡びる人が亡びても、それは私とは関わりない」

と、そういうことを言っている。

²⁷我は憚らずして神の御旨をことごとく汝らに告げしなり。²⁸汝等みずから心せよ、又すべての群に心せよ、聖霊は汝等を群のなかに立てて監督となし、



パウロは、いくつかの教会の長老たちを呼び集めてますから。それぞれの単立教会の監督としてあなた方は集まってくれたね。長老さんたちに神さまは託されたのだからと。

神の己の血をもて買い給いし教会を牧せしめ給う。

キリストの十字架の血潮で贖って潔めてそこにお建てになった、そういう神の群れを牧会せしめたもう。まあここでは、私がその役目を担っているということになりますね。

²⁹われ知る、わが出で去るのち、^{あら おおかみ}暴き豺狼なんじらの中に入りきたりて、群を惜しまず、³⁰又なんじらの中よりも、弟子たちを己が方に引き入れんとて、曲れることを語るもの起こらん。

これは私に適用するなら、私がこの世を去ったあと、この京都キリスト召団はどうなるだろうかということにも通じるお話です。

³¹されば汝ら目を覚しおれ。三年の間わが夜も昼も休まず、涙をもて汝等おのおのを訓戒せしことを憶えよ。³²われ今なんじらを、主および其の恵みの御言に委ぬ。御言は汝らの徳を建て、すべての潔められたる者とともに嗣業〔天国〕を受けしめ得るなり。

これが私が去る時の、また皆さんに遺す言葉ですよ。そう思っている。三年か何年かしりません、私がここでご奉仕するのは。しかしながら、

「夜も昼も休まず、涙をもていろんな御言を与えた。今、あなた方を

これは長老さんたちに言っている

主および其の恵みの御言にお委ねする。御言は汝らの徳を建て、すべての潔められたる者とともに天国、御国を受けしめ得るだけの力を持っているんだから」

と。そしてパウロは、

³³我は人の金銀・衣服を貪りし事なし。

伝道で人々から金を集め、私腹をこやす偽伝道者も世の中にはたくさんいるかもしれない。自分はそんな金銀・衣服を何も求めたことはない。

³⁴この手は我が必要に供え、

パウロは天幕造りをやっていましたから。

また我と偕なる者に供えしことを汝等みずから知る。³⁵我すべての事に於て例を示せり、即ち汝らも斯く働きて、弱き者を助け、また主イエスの自ら言ひ給いし「与うるは受くるよりも幸福なり」との御言を記憶すべきなり」

人々は承るけれども、与えることが大事だと。どんどん与えていくなら、空っぽになったところへそれを倍増するように満たしてくださるという。そういうことが山上の垂訓でも語られていましたね。

「人はその量りによりて量られる云々」



とありました。このパウロの長老さんたちに与えた言葉は、集会、教会の牧会にあたる者が本当に心得るべき事柄だと私は思っています。そしてまた、その者が世を去っていくときに、次の人に託していく。

さあ、この京都キリスト召団は誰に託するんでしょうかね。誰に託せばいいんでしょうかね。それは主が自ずと決めてくださると思いますけれども。

まあそんなことで、今日はペンテコステ集会ということに因んで、御言を辿っていった次第です。一番初めに引きましたように、イザヤ書64章に、

「願くはなんじ天を裂てくだり給えなんじのみまゑに山々ふるい動かんことを²火の柴をもやし火の水を沸かすがごとくして降りたまえ」（イザヤ64・1）

と、この祈りが我々にとっては、

「御霊よくだりたまえ。聖霊の火よ、降ってください」

と。人間の熱心では、伝道も集会も保てません。御霊の火がこの集会に臨み、燃やしてくださって初めて、本当の祈りがそこに生まれ、一つになっていきます。伝道の使命、そしてまたそれを果たす力、それが伴っていきます。もちろん、人間の側の熱心は必要なんです。人間の側の熱心は必要なんだけれども、それだけではだめなんです。それを起点として、そこにその祈りに応えて、

「求めの切なる祈り、必要とするものを与える」

とありました。

「求めよ、さらば与えられん」

とありました。我々の側からは主さまに、

「聖霊の火を燃やしてください。ここを燃える炎の集会にしてください」

と、そういう祈りが一致して天に捧げられたときに、今度は、神さまの側から、

「時は満ちた」

といって、火を降してください。それが私の夢みているこの集会の姿です。

まだまだです。この集会が本当に聖霊の火に燃えているとはまだ言い難い、と私には映っています。我らは祈りを一つにして祈り求めていくときに、そのときにペンテコステにおいて起こったように、聖霊の火が降ってきて、本当にキリストの証人^{あかしびと}にしてください。そんなことを私は夢みています。

はい、それではこれで終わることにいたしました。

